

仙台市文化財調査報告書第216集

仙台平野の遺跡群 XVI

— 平成 8 年度発掘調査報告書 —

燕沢遺跡第10次調査など

1997年3月

仙台市教育委員会

仙台平野の遺跡群 XVI

— 平成 8 年度発掘調査報告書 —
燕沢遺跡第10次調査など

1997年3月

仙台市教育委員会

序 文

国庫補助事業として「仙台平野の遺跡群」発掘調査に着手したのは昭和56年度でした。この事業も数えて16年目を迎え、これまで陸奥国分寺跡、国分尼寺跡の国指定史跡の範囲確認調査や郡山遺跡、富沢遺跡などの個人住宅建築に伴う小規模調査を行ってまいりました。今年度は、燕沢遺跡の範囲の確認調査ならびに性格究明のための発掘調査、郡山遺跡の個人住宅建築に伴う発掘調査を実施しました。また土地改良総合整備事業に先立つての成館跡の発掘調査も実施し、本書はそれらの調査成果をまとめたものであります。

当市は平成元年4月に政令指定都市となり、都市整備の充実が急務となってきております。こうした中で、道路整備に関わる総合交通体系の整備事業や区画整理事業を基盤とした町づくりが進められています。一方、民間の小規模開発も増加し、発掘調査件数も漸次増加する傾向にあります。

当市教育委員会では、先人の創造した歴史と文化遺産を次の世代に継承し、生活の中での活用を図っていかなければならない責務を負っています。しかし、こうした文化財の保護活用は、市民の方々の御支援があってこそ、はじめて成果をあげられるものと思います。

今後とも広い視野にたって充実した遺跡保護を行っていくために、精一杯努力してまいる所存でありますので、さらなる御指導、御支援を切にお願い申し上げ、刊行のご挨拶と致します。

平成9年3月

仙台市教育委員会
教育長 堀 龍 克 彦

例　　言

1. 本書は平成 8 年度国庫補助事業である緊急遺跡範囲確認事業に伴う「仙台平野の遺跡群」の発掘調査報告書である。
2. 本書の土色については「新版標準土色帖」(小山・佐原:1973) を使用した。
3. 実測図中の水糸高は標高である。
4. 実測図、本文中の方位は真北を基準としてある。仙台においては、磁北は真北に対して西偏約7°20'である。
5. 本文執筆は、長島榮一 I、II[1]1、豊村幸宏 II[1]2、3、[2]1、2、森剛男 II [1]2、篠原信彦 II[3]が行い、編集は、長島・豊村がこれにあたった。
6. 遺構略号は次の通りとした。

S A 柱列 S B 建物跡 S D 溝跡・溝状遺構
S I 住居跡・竪穴遺構 S K 土坑 S X 性格不明遺構

7. 本書中に掲載した発掘調査で出土した遺物及び遺構・遺物の実測図は、全て仙台市教育委員会が保管している。
8. 今年度事業は平成 8 年 4 月に着手し、平成 9 年 3 月に終了した。

目 次

序文

例言

I 調査計画と実績..... I

II 発掘調査報告

[1] 燕沢遺跡—第10次調査—

1. 調査経過.....	3
2. 発見遺構と出土遺物	
I 区	5
II A 区	16
II B 区	16
3. まとめ.....	19
写真図版.....	22

[2] 郡山遺跡

1. 位置と環境.....	29
2. 調査概要	
第114次調査	29

[3] 成館跡

1. 調査に至る経過.....	31
2. 調査要項.....	31
3. 遺跡の位置と環境.....	31
4. 調査の方法.....	33
5. 調査の概要.....	33
6. まとめ.....	35
写真図版.....	36

I 調査計画と実績

仙台市は昭和62年に宮城町、昭和63年に泉市、秋保町と合併し、明治22年の市制施行以来100周年にあたる平成元年に、全国11番目の政令指定都市に移行した。さらに市営地下鉄の開業や延長、仙台空港の国際化、高速道路網の充実によって著しい都市化が進む状況になってきている。旧仙台市域では辛うじて残っていた農地も急速に宅地になり、緑ゆたかであった郊外の丘陵地も開発の予定が表明される時世となっている。

仙台市内の遺跡一堀藏文化財包蔵他一は約700箇所に達するが、日々変化する社会の中で現状のまま将来に残し、伝えていくのはきわめて困難である。このような中で開発に対応した発掘調査だけではなく、事前に遺跡の範囲と性格明確を目的とした発掘調査を実施して行くことが、今後の遺跡保護に重要と考えられる。また遺跡内での個人住宅や木造の共同住宅建築のような小規模開発に伴う発掘調査も必要に応じ実施し継続していくことが、遺跡の範囲確認や遺構の在り方を検討するうえでも有用と考えられる。それらを目的として当市教育委員会では昭和56年度より国の補助を受け、「仙台平野の遺跡群」の発掘調査を実施してきた。これまで郡山遺跡をはじめ、陸奥國分寺跡、陸奥國分尼守跡、仙台城巽門跡、大年寺惣門、長町駅東遺跡（長町貨物ヤード跡地）で発掘調査を実施し、大きな成果をあげている。

今年度は燕沢遺跡と郡山遺跡で発掘調査を実施した。燕沢遺跡は平成5年度から継続的に調査し、今年度で4年次目になる。昨年の第9次調査では平安時代の建物跡を発見し、寺院の中心的な建物跡と考えられる遺構を発見した。今年度はその西に隣接した地区で、寺院に関連した建物跡を発見する目的で調査を実施した。また郡山遺跡では個人住宅建設に伴っての小規模な発掘調査（第114次）を実施した。なお郡山遺跡での発掘調査については、仙台市文化財調査報告書第215集「郡山遺跡XVII—平成8年度発掘調査概報一」に詳細に記述し、本報告では概要を載せるにとどめている。

また今年度は青葉区芋沢の本沢上地区で計画されている土地改良統合整備事業に先立って、同地区内に所在する成館跡で発掘調査を実施した。その調査費用の一部を負担し、調査成果を合わせて掲載している。

1. 目的 仙台平野に分布する遺跡群の範囲、性格明確のための発掘調査

2. 調査面積 400m²

3. 調査期間 平成8年4月～12月

4. 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

課長 小井川和夫

調査第一係 係長 田中則和 主査 木村浩二 主事 長島榮一

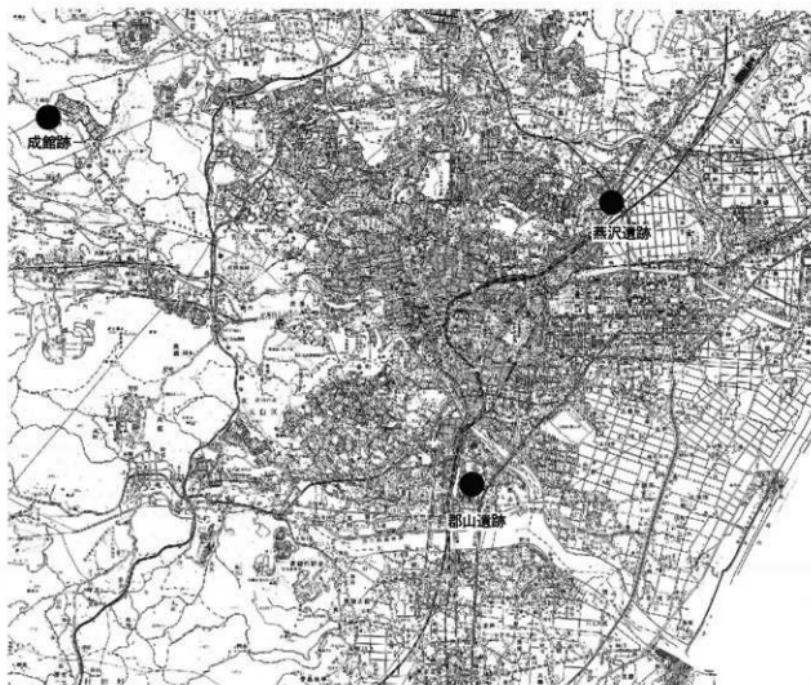
文化財教諭 豊村幸宏 署託 森剛男

調査第二係 係長 結城慎一 主査 篠原信彦

管理係 係長 千葉晴洋 主事 福井健司 主事 佐藤美弥子

調査実績表

調査地	所在地	申請者	調査事由	対象面積	調査面積	調査期間
燕沢遺跡	宮城野区燕沢東 三丁目526地	仙台市教育委員会教育長 細瀬克彦	測量確認	520m ²	400m ²	平成8年4月22日 ～6月24日
郡山遺跡	太白区郡山 三丁目23-8	太白区郡山三丁目23-8 伊藤みさき	個人住宅建築	10m ²	10m ²	平成8年12月9日
成館跡	青葉区成館字駒込	仙台市教育委員会教育長 細瀬克彦	土地改良統合 整備事業	13,000m ²	140m ²	平成8年11月5日 ～11月15日



第1図 遺跡位置図

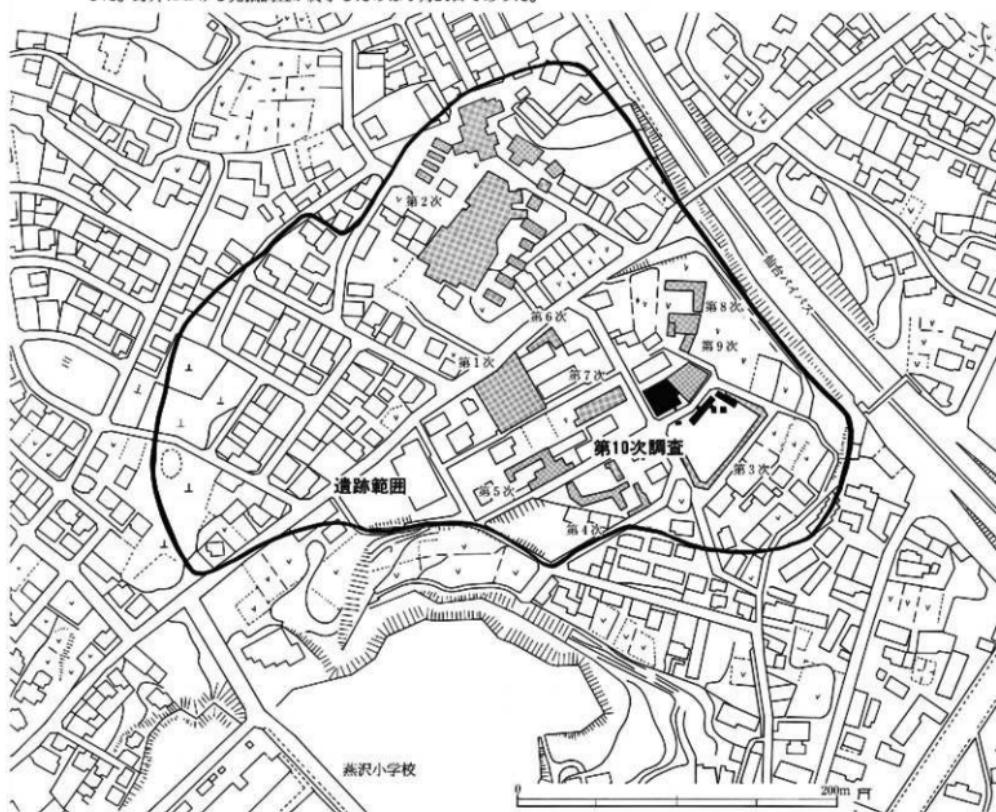
II 発掘調査報告

[1] 燕沢遺跡－第10次調査－

1. 調査経過

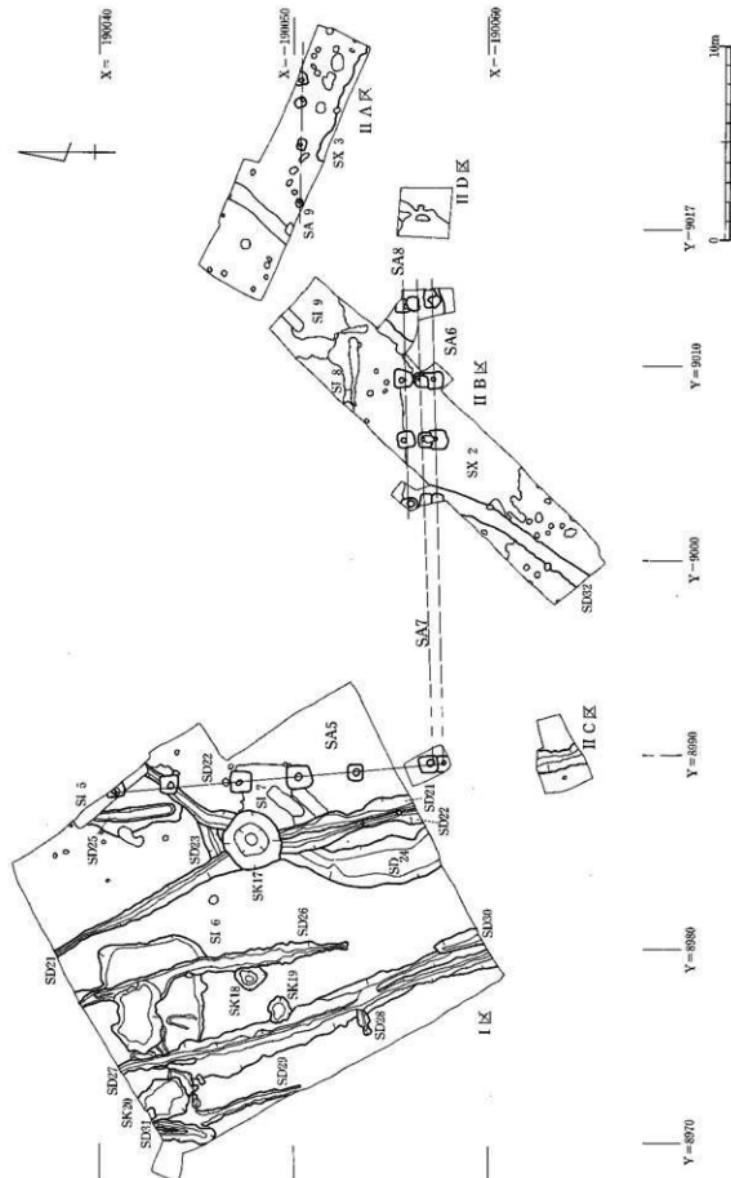
平成5年度の第7次調査より、遺跡内の最も標高の高い平坦地で発掘調査を実施している。今年度は昨年度の第9次調査の西側と南側に、3箇所の調査区を設定して発掘調査を実施した。I区は第9次調査で寺院の中心的な建物跡と推定したSB3 据立柱建物跡の西側で、関連する遺構が存在するかどうかを明らかにする目的で設定した。第9次調査ではSB4 据立柱建物跡とした柱穴が既に発見されており、その延長部が検出されることが想定され、どのような建物跡になるかが注目された。II区はSB3 据立柱建物跡の南側に門跡などの遺構の有無を明らかにする目的で設定した。また調査中に遺構の様相を把握するため、小規模な調査区を3箇所追加設定した。

発掘調査は4月22日から実施し、遺構の概要が明らかとなった6月7日に周辺の住民を対象にした説明会を実施した。野外における発掘調査が終了したのは6月24日であった。



第2図 調査区位置図

第3圖 烏沢遺跡遺構圖



2. 発見遺構と出土遺物

第10次調査で発見された遺構は、柱列5列、溝跡10条、竪穴遺構5基、土坑6基、性格不明遺構3基、小柱穴、ピットなどである。これらの遺構は、畑の耕作土（基本層位第I層）の直下の第IIa層で検出されている。

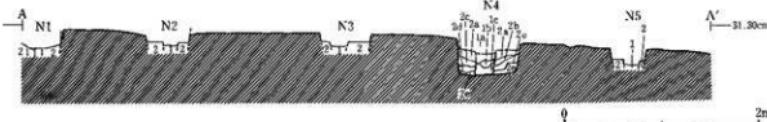
遺構番号と遺物番号については第7次調査からの継続番号であり、第1次調査から第6次調査までとは区別している。また、遺構の中には検出したにとどめ、掘り込まれなかったものもあり、詳細の明らかでない遺構は記載を略している。

○ I 区

S A 5 柱列 調査区の東半をほぼ南北方向に延びる柱列である。総長は16.5mと推定され、柱間寸法は296~360cm、方向はN-4.5°-Wである。柱穴は掘り方が一辺75~123cm×80~115cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径30~40cmの円形である。柱穴の深さは遺構を検出した上面より30~37cmほどである。掘り方の埋め土は、黄褐色粘土質シルト、黒褐色、暗褐色粘土で、焼土や炭化物を少量含んでいる。南端の柱穴のみ建替えがあり、II B区で検出したSA6、7柱列と接続する可能性がある。

SI5、7竪穴遺構を切り、SD22溝跡に切られている。

【出土遺物】柱穴の掘り方埋め土よりG-52瓦斗瓦（第4図1）、土師器坏片、甕片、赤焼き土器高台付坏片、坏片、須恵器片、鉄製品などが出土している。



部位	土色	土性	備考	部位	土色	土性	備考
N 1				1 b	10YR3/3	暗褐色	粘土
1 N5/0	灰褐色	粘土		1 c	10YR3/1	黑褐色	粘土 礫を含む
2 10YR4/2	灰黃褐色	粘土	黄褐色粘土を斑状に含む	通り方埋め土			
N 2				2 a	2.5Y5/4	黄褐色	粘土質シルト 礫を多量に含む
1 10YR3/2	黑褐色	粘土		2 b	2.5Y5/3	黄褐色	粘土質シルト 2 aより黄褐色粘土を含む
2 10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	礫を含む	2 c	2.5Y5/4	黄褐色	粘土質シルト 大礫を多量に含む
N 3				2 d	10YR2/1	黑褐色	粘土 灰褐色を多量に含む
1 10YR4/2	灰黃褐色	粘土質シルト	大きな礫1点含む	2 e	10YR3/3	暗褐色	粘土 礫を含む
2 10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	礫を多量に含む	N 5			
N 4				1	10YR4/4	暗褐色	粘土質シルト 炭化物を少量含む
柱痕跡				2	10YR2/3	灰黃褐色	粘土質シルト 礫を多量に含む
1 a 10YR3/3	暗褐色	粘土					

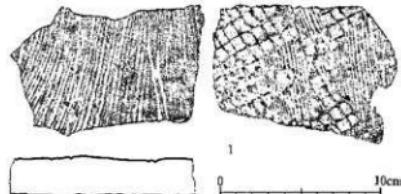
第5図 SA 5 柱列断面図

S 1 5 竪穴遺構 調査区の北東端で検出した遺構である。東西3.0m、南北4.8m以上で、不整形と推定される。昨年の第9次調査区では残存する深さが20~40cmで、壁は緩やかに立ち上がりっている。底面はほぼ平坦であったが、中心部分に向かってきわめて緩やかに傾斜していた。堆積土は暗褐色シルトであった。

S A 5 柱列、S D22、25溝跡に切られている。

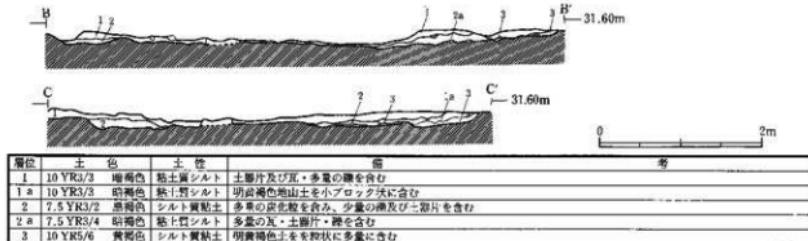
S 1 6 竪穴遺構 調査区の北部で検出した遺構である。東西6.5m、南北5.3mで、不整形である。残存する深さは6~19cmで、底面は凹凸が著しく一定していない。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は暗褐色、黒褐色シルト質粘土で、摩滅の著しい土器や瓦、礫などを含んでいる。

S D26、27溝跡に切られている。



第4図 SA 5 柱列出土遺物

部番	基盤	鉢	瓶	壺	山土	水	符	備考
1	G-52	變斗瓦	1	X	SA-3	5000円←火器、強制労役→	11-1	



第6図 SI 6豊穴遺構断面図

〔出土遺物〕 堆積土中より土師器D-67~77环（第7図1~8）、須恵器E-14环、15环（第7図10）、16壹（第7図11）、17壹（図版11~17）、20环（第7図9）、24不明品（図版13~12）、F-24齒車文軒丸瓦（第8図1）、G-47均整唐草文軒平瓦（第8図2）、51均整唐草文軒平瓦（第8図5）、61均整唐草文軒平瓦（第8図3）、63均整唐草文軒平瓦（第8図4）、椀型溝とみられるN-7鉄滓（第8図6）、N-4、5、6鉄岸（図版13~14、15、16）、石器K-20スクレイバー（図版13~21）が出土している。

S I 7豊穴遺構 調査区の東部で検出した遺構である。東西3.4m、南北2.8mで、隅丸長方形である。方向は東辺で真北方向である。

S A 5柱列、S K17土坑、S D21、22溝跡に切られている。

S D21溝跡 縦長はII C区を含めて19.7m以上で、南北方向に延びる溝跡である。上幅30~125cm、下幅10~50cm、深さ7~14cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形はU字形である。底面はほぼ平坦である。方向はN-32°~Wで、堆積土は暗褐色粘土質シルトである。

S D23溝跡、S I 7豊穴遺構を切り、S D22溝跡、S K17土坑に切られている。

〔出土遺物〕 堆積土中より丸瓦片2点、平瓦片3点が出土している。

S D22溝跡 縦長12.2mほどの湾曲しながら斜面下方に延びる溝跡である。上幅35~113cm、下幅6~40cm、深さ3~15cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は扁平なU字形である。底面はほぼ平坦である。堆積土は暗褐色粘土質シルトである。第9次調査区で検出したS D17溝跡の延長部である。

S D21、23、24溝跡、S I 7豊穴遺構を切り、S A 5柱列に切られている。

〔出土遺物〕 堆積土中より須恵器E-23甕片（第13図4）、环片、須恵器坏片、赤焼き土器高台付坏片、丸瓦片、平瓦片、繩文土器の小片が出土している。

S D23溝跡 縦長2.0mで、ほぼ東西方向に延びる溝跡である。上幅80cm、下幅10~25cm、深さ5~10cmで、断面形はU字形である。底面には凹凸がある。方向はE-20°~Nである。

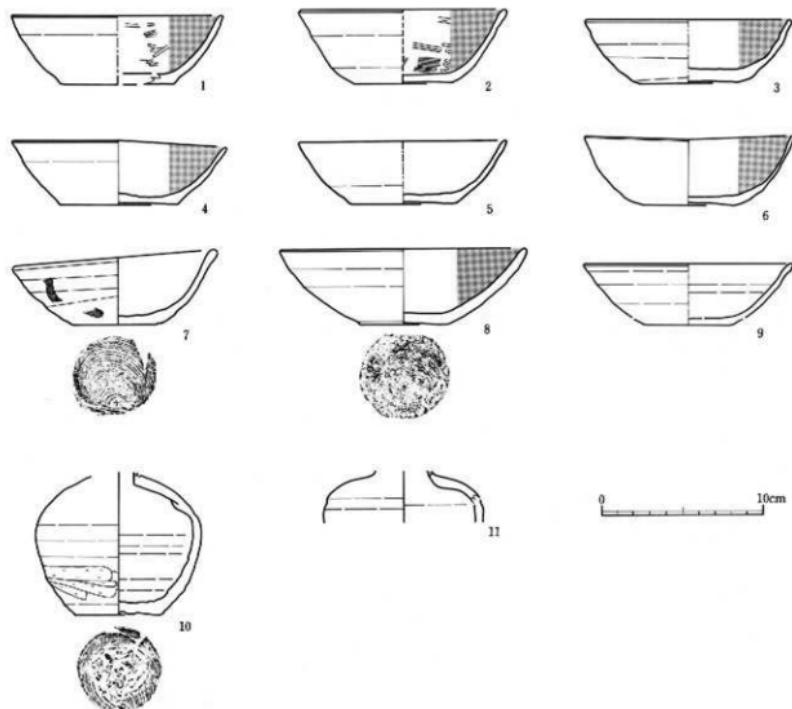
S D21、22溝跡、S K17土坑に切られている。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

S D24溝跡 縦長8.3mほどの湾曲しながら斜面下方に延びる溝跡である。上幅140~250cm、下幅45~140cm、深さ9~15cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は扁平な舟底形である。底面には段差があり、東側が低くなっている。堆積土は暗褐色、褐色粘土質シルトで、礫を多量に含んでいる。北半部は検出されなかったが、S D22溝跡と連続する可能性がある。S D21溝跡、S K17土坑に切られている。

〔出土遺物〕 堆積土中より土師器坏片、須恵器甕片、壺片、丸瓦片、平瓦片が出土している。

S D25溝跡 縦長4.15mほどの南北方向に延びる溝跡である。上幅50~70cm、下幅30~40cm、深さ5~12cmで、壁は直立気味に立ち上がり、断面形はU字形である。底面はほぼ平坦である。方向はN-6.5°~Wで、堆積土は褐色



図版 番号	登録番号	種別・断形	出土地点	法量(cm)	外観概要		内部実態	備考	写真 説明			
					道筋	壁面	壁面	口縁部	底部			
1	D-68	土師器・灰	I区 SI-6	1層	4	13.2	7	クロロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色鉄錆	11-5	
2	D-69	土師器・灰	I区 SI-6	2層	4.6	13.0	6.2	クロロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色鉄錆	付着物あり	11-6
3	D-71	土師器・灰	I区 SI-6	1層	4.05	12.9	6	クロロナデ	回転糸切り	黑色鉄錆	11-8	
4	D-74	土師器・灰	I区 SI-6	1層	4.4	13.1	7.4	クロロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色鉄錆	11-11	
5	D-76	土師器・灰	I区 SI-6		3.9	13.0	6.6	クロロナデ	回転糸切り	クロロナデ	11-13	
6	D-77	土師器・灰	I区 SI-6		4.9	13.2	5.8	クロロナデ	ミガキ・黒色鉄錆	底底が著しい	11-14	
7	D-67	土師器・灰	I区 SI-6	1層	4.7	12.8	5.4	クロロナデ	回転糸切り	クロロナデ	付着物あり	11-4
8	D-75	土師器・灰	I区 SI-6	1層	4.7	15.4	5.6	クロロナデ	回転糸切り	ミガキ・黒色鉄錆	11-12	
9	E-20	須恵器・灰	I区 SI-6	2層	3.8	13.0	5.6	クロロナデ	回転糸切り	クロロナデ	11-18	
10	E-15	須恵器・灰	I区 SI-6	1+2層	8.9	5.4	5.4	クロロナデ	回転糸切り	クロロナデ	11-15	
11	E-16	須恵器・灰	I区 SI-6	2層				クロロナデ	クロロナデ	11-16		

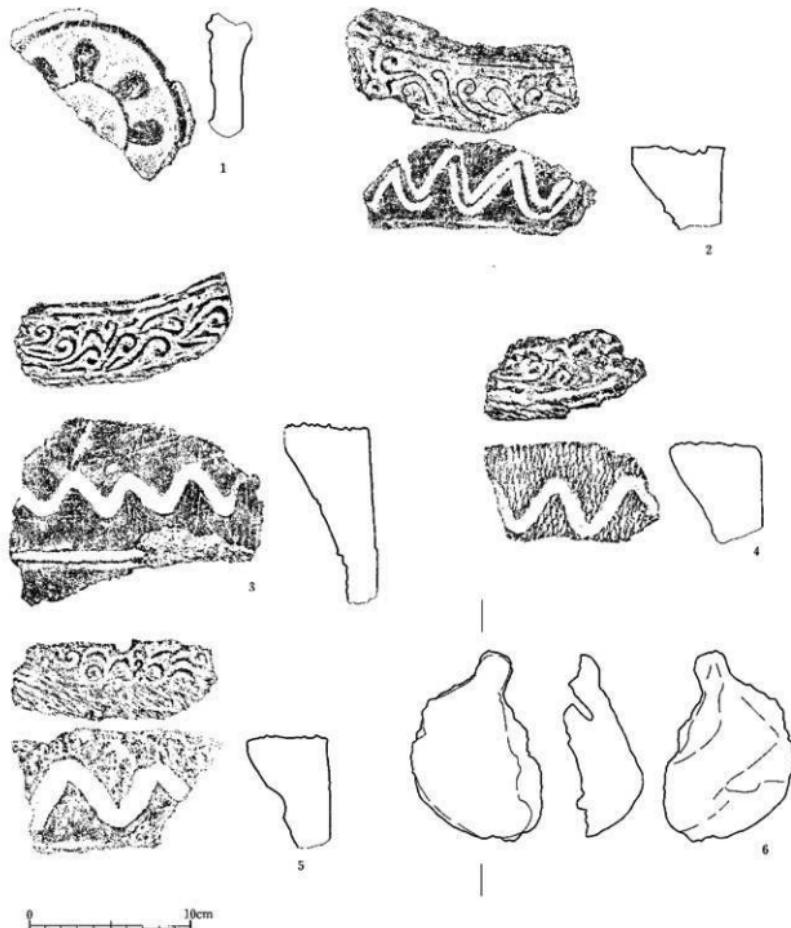
第7図 SI 6 穴式造構出土遺物（1）

粘土質シルトで、炭化物を少量含んでいる。SA 5柱列とほぼ平行している。

S I 5 穴式造構を切っている。

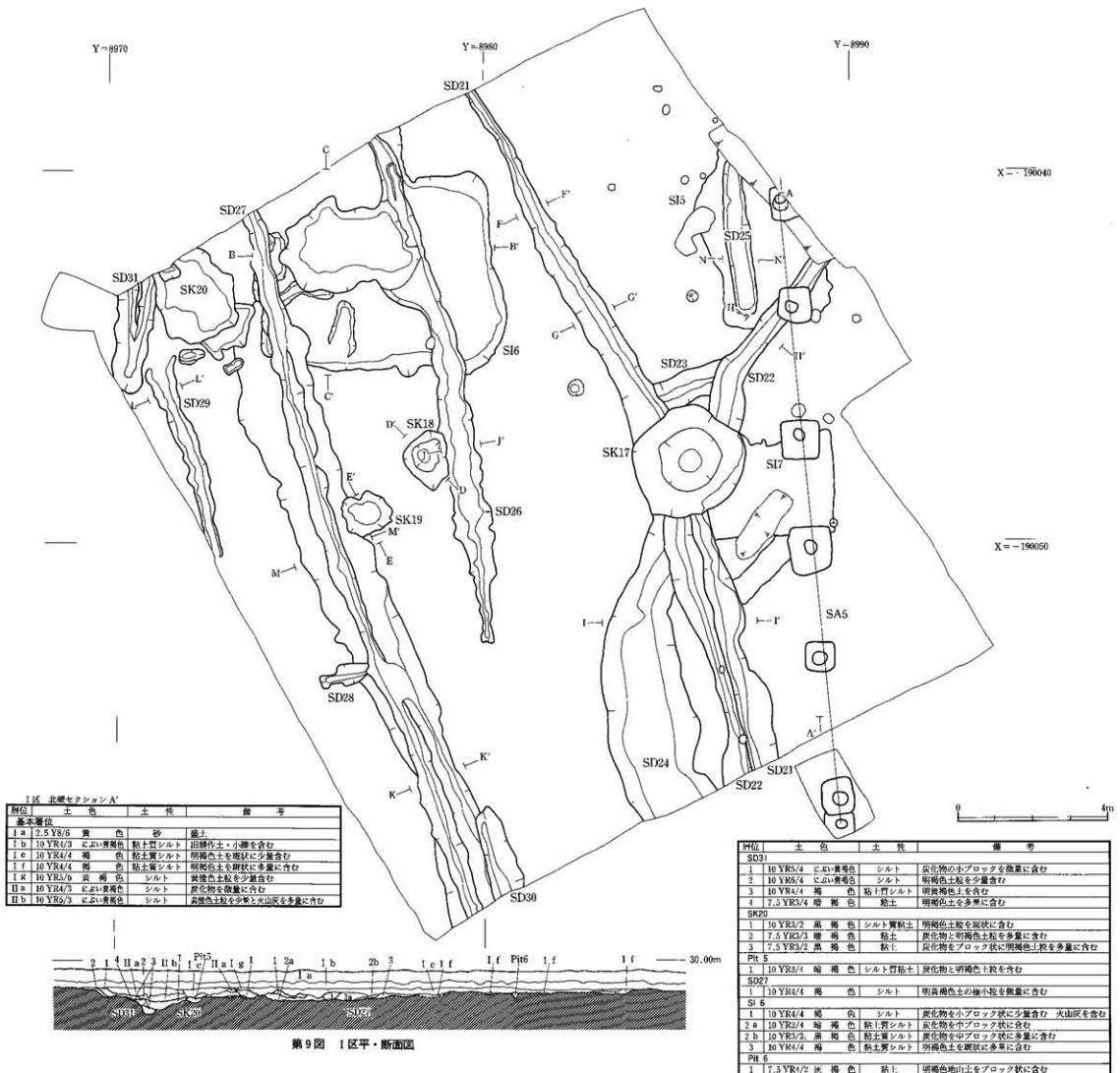
【出土遺物】 堆積土中より土師器坏片、甕片、須恵器坏片、甕片、赤焼き土器坏片、丸瓦片、平瓦片が出土している。

S D26溝跡 総長14m でほぼ南北方向に延びる溝跡である。上幅40~95cm、下幅10~50cm、深さ7~9cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形はやや歪んだ舟底形である。底面はほぼ平坦である。方向はN-4.5°-Wで、堆



图版 番号	基盤 番号	識別 番号	出土地點				特 徴	備 考	写真 加版
			地区	遺 跡	層 位	層位			
1	F-24	軒瓦瓦	I区	SI-6	2層	唐宋文			11-19
2	G-47	軒瓦瓦	I区	SI-6	1層	均繩改草文			11-20
3	G-61	軒瓦瓦	I区	SI-6	1層	均繩改草文			11-22
4	G-63	軒瓦瓦	I区	SI-6	1層	均繩改草文			11-23
5	G-51	軒瓦瓦	I区	SI-6	1層	均繩改草文			11-21
6	N-7	鉢	I区	SI-6	1層	径21.6cm 深8.1cm 口徑33.3cm	断滅が著しい		12-1
							断滅が著しい		
							角形鉢		

第8図 SI 6 竪穴遺構出土遺物（2）



堆積土は褐色粘土質シルトである。

S I 6 穫穴遺構、S K18土坑を切っている。

〔出土遺物〕 堆積土中より須恵器E-18壺片（図版13-13）、F-29細弁蓮華文軒丸瓦（第12図1）、F-31齒車文軒丸瓦（第12図2）、G-54均整唐草文軒平瓦（第12図4）、55均整唐草文軒平瓦（第12図5）、56均整唐草文軒平瓦（図版12-5）、N-3鉄津（図版12-6）、石器K-21剝片（図版13-20）や、土師器、須恵器、瓦の小片が多量に出土している。

S D 27溝跡 縦長20mでほぼ南北方向に延びる溝跡である。上幅50~220cm、下幅15~30cm、深さ10cmで、壁は直立気味に立ち上がったのち、きわめて緩やかになる。断面形は扁平な舟底形である。底面は平坦である。方向はN-13°-Wで、堆積土は褐色シルト質粘土で、礫を含んでいる。南半で二条に分岐する。

S D 30溝跡、S K19土坑、S I 6 穫穴遺構を切り、S D 28溝跡に切られている。

〔出土遺物〕 堆積土中より土師器坏片、壺片、須恵器壺片、壺片、瓦片などが出土している。

S D 28溝跡 縦長1.4mでほぼ東西方向に延びる溝跡である。上幅60~85cm、下幅10~25cm、深さ5~12cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形である。底面は平坦である。方向はN-24°-Wで、堆積土は黄褐色粘土質シルトである。

S D 27、30溝跡を切っている。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

S D 29溝跡 縦長5.5mでほぼ南北方向に延びる溝跡である。上幅40~70cm、下幅12~30cm、深さ5cmで、壁はきわめて緩やかに立ち上がり、断面形は扁平なU字形である。底面は平坦である。方向はN-15°-Wで、堆積土は褐色粘土質シルトである。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

S D 30溝跡 縦長2.4mでほぼ南北方向に延びる溝跡である。上幅55~90cm、下幅10~30cm、深さ13~22cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形はU字形である。底面はほぼ平坦である。方向はN-12°-Wで、堆積土は黄褐色シルト質粘土である。

S D 27、28溝跡を切っている。

〔出土遺物〕 堆積土中より土師器坏片、須恵器壺片、壺片、瓦片が出土している。

S D 31溝跡 縦長2.9mでほぼ南北方向に延びる溝跡である。北半では二条に分岐している。上幅80~100cm、下幅〔北半東〕15cm、〔北半西〕10~30cm、〔南半〕23cm、深さ12~23cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は南北ではU字形である。底面は平坦である。方向はN-5°-Eで、堆積土は黄褐色シルト、褐色、暗褐色粘土質シルトなどである。

S K20を切っている。

〔出土遺物〕 堆積土中からG-53均整唐草文軒平瓦（図版12-8）が出土している。

S K 17土坑 南北300cm、東西300cmのほぼ円形の土坑で、深さは110cmである。底面は摺り鉢状を呈している。

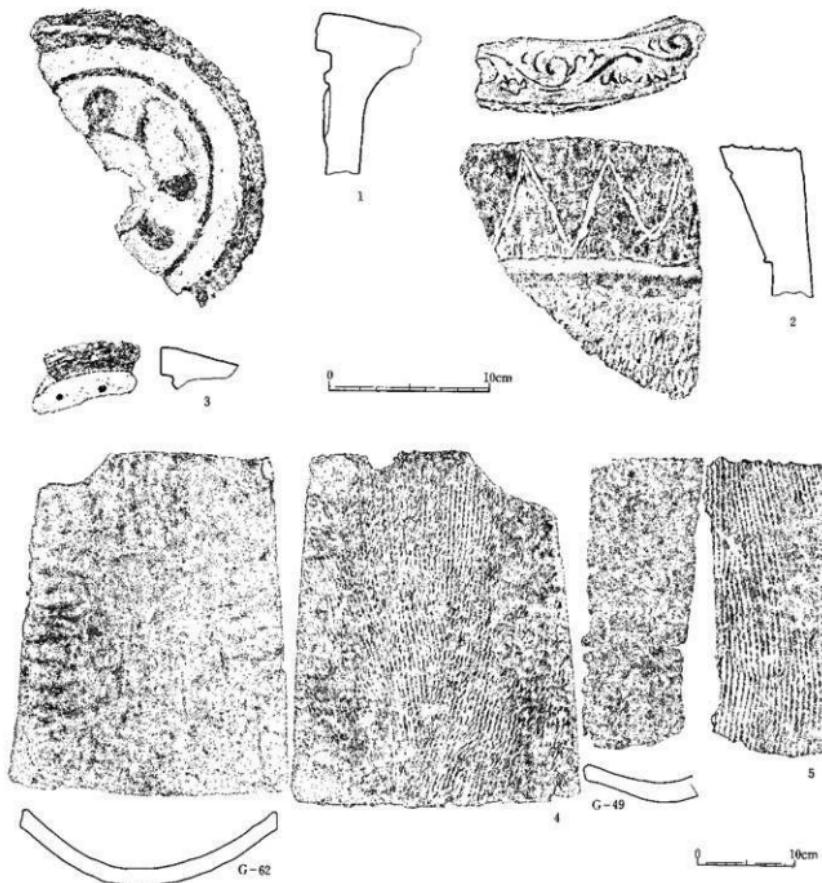
S D 21、22、23、24溝跡、S I 7 穫穴遺構を切っている。

〔出土遺物〕 堆積土中よりF-25齒車文軒丸瓦（第13図5）、G-48均整唐草文軒平瓦（図版12-11）、土師器坏片、須恵器坏片、壺片、壺片、丸瓦片、平瓦片が多量に出土している。

S K 18土坑 南北160cm、東西117cmの不整横円形の土坑で、深さは30cmである。底面は摺り鉢状を呈している。堆積土は褐色粘土質シルトである。

S D 26溝跡に切られている。

〔出土遺物〕 堆積土中よりF-26齒車文軒丸瓦（第10図1）、32細弁蓮華文軒丸瓦（第10図3）、G-49平瓦（第



回数 番号	登録 番号	種別 图形	出土地点		特 徴	備 考	写真 版
			地区	遺構			
1 F-26		軒丸瓦	I区	SK-18	衝文		12-12
2 G-50		軒平瓦	I区	SK-18	均整唐草文 凸面焼印き→ナデ→繊微文、凹面布目模		12-1
3 F-32		軒丸瓦	I区	SK-18	繊微連華文		12-13
4 G-62		平 瓦	I区	SK-18	凸面焼印き、凹面布目模		12-15
5 G-49		平 瓦	I区	SK-18	凸面焼印き→ナデ、凹面→スリケン		12-14

第10図 SK18 土坑出土遺物

10図5)、50均整唐草文軒平瓦(第10図2)、62平瓦(第10図4)や、土器器坏片、甕片、丸瓦片、平瓦片が出土している。

S K19土坑 南北115cm、東西135cmの不整楕円形の土坑で、深さは10cmである。底面は平坦である。堆積土は褐色粘土質シルト、黄褐色シルト質粘土などで、炭化物や礫を多量に含んでいる。

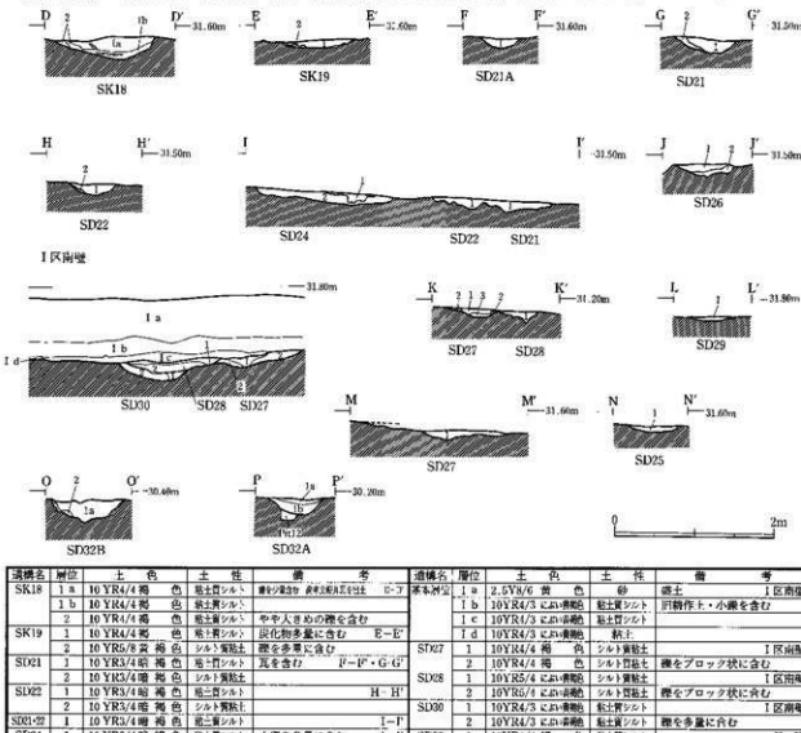
S D27溝跡に切られている。

【出土遺物】 堆積土中よりF-27重弁蓮華文軒丸瓦(図版13-2)や土器器坏片、平瓦片が各1点出土している。

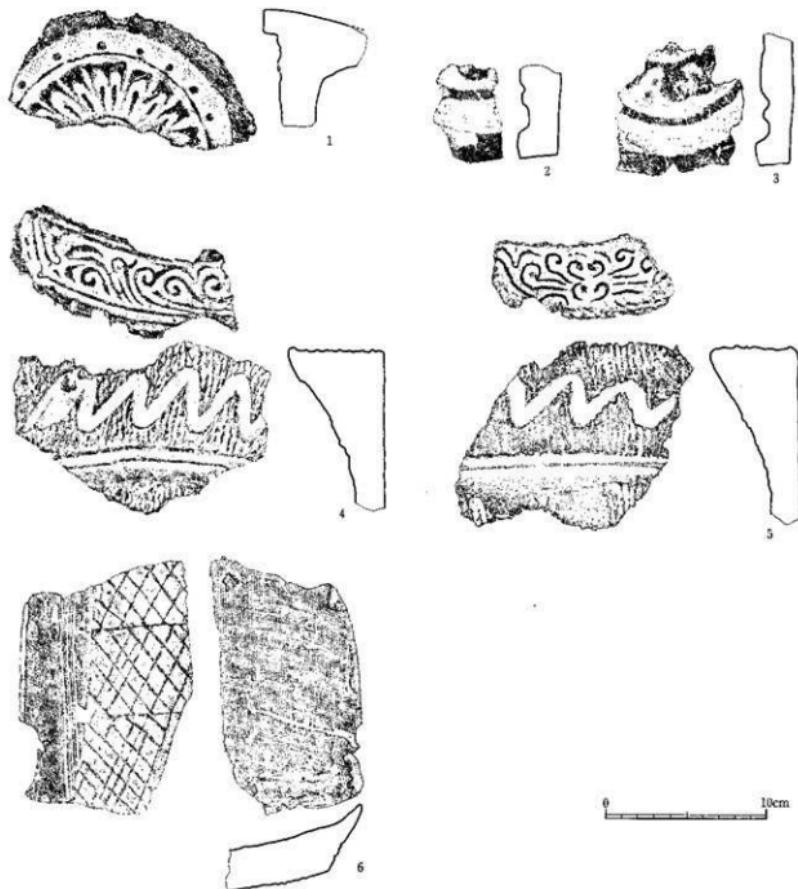
S K20土坑 南北250cm以上、東西212cmの不整楕円形の土坑で、深さは12~30cmである。底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色シルト質粘土などである。

S D31溝跡に切られている。

【出土遺物】 堆積土中より土器器坏片、須恵器甕片、壺片、丸瓦片、平瓦片が多量に出土している。

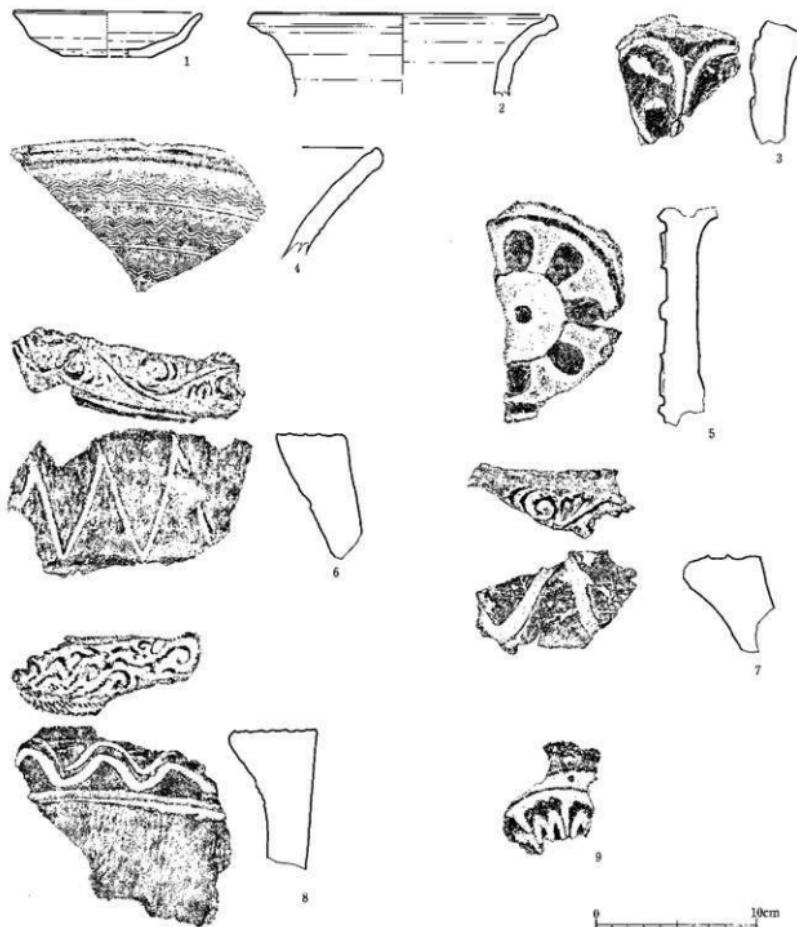


第11図 第10次調査断面図（土坑・溝跡）



図版 番号	遺跡 番号	種別 器形	出土地点			特　徴	備　考	写真 図版
			地区	道　県	層位			
1	F-29	軒丸瓦	I区	SD-25	1層	細介織草文 幹夷ヶズリ、四面ナデ		12-2
2	F-31	軒丸瓦	II区	SD-25	1層	角本文 四面押切の字→ナデ		12-8
3	F-30	軒丸瓦	II B区	カクラン		鹿皮文		12-9
4	G-54	軒平瓦	I区	SD-25	1層	馬鹿頭模文		12-3
5	G-55	軒平瓦	I区	SD-25	1層	均盤齒瓦文		12-4
6	G-60	平瓦	II B区	通筋接合面		内側格子叩木、四面布目施		

第12図 第10次調査出土遺物（1）



器種	登錄 番号	縁形	出土地点	特 徴	備 考	文獻 出典
	1 E-21	側面弧・环	II B区 遺構検出面	器高 2.8 cm 口径(11.8 cm) 底径(5.6 cm)	内側に海螺状の付着物あり	13-10
	2 E-22	側面弧・環	II B区 SA7W6 破き取り	11径 19.2 cm		11-3
	3 F-27					13-2
	4 E-23	側面弧・環	I区 SD-22	1層 波状波線文		
	5 F-25	新丸瓦	I区 SK-19	1層 重ね文		12-10
	6 G-53	新平瓦	I区 SD-21	馬鹿床波文		12-8
	7 G-46	新平丸	I区 遺構検出面	波状波線文		13-9
	8 G-59	新平瓦	I区 SK29	1層 馬鹿床波文		13-3
	9 F-23	新丸瓦	I区 遺構検出面	海螺状文		13-7

第13図 第10次調査出土遺物（2）

○II A区

S A 9 柱列 調査区のほぼ中央を東西方向に延びる柱列である。総長は6.2m以上、柱間寸法は292~323cm、方向はE-0'-Nである。柱穴は、掘り方が一辺47~69cm×38~43cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径21~28cmの円形もしくは梢円形である。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

S X 3 調査区の西壁沿いに溝状に一部を検出したのみで、遺構が調査区外へ延びるために全体の形状や規模は不明である。検出長は6.33m、上幅は46cm以上、深さは13~37cmである。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、暗褐色シルト及び粘土質シルト、黒褐色粘土質シルトである。

[出土遺物] 堆積土中より、土師器坏片、甕片、須恵器坏片、繩文土器片、丸瓦片、石器が出土している。

○II B区

S A 6 柱列 東西方向に延びる柱列である。総長23.6m以上、柱間寸法は312~403cm、方向はE-3'-Nである。柱穴は、掘り方が一辺86~103cm×85~89cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径22~30cmの円形である。柱穴の深さは遺構検出面より50cmほどである。掘り方の埋め土は、褐色シルト質粘土、暗褐色粘土質シルト及び粘土、にぶい黄褐色シルト及びシルト質粘土、黒褐色粘土質シルトである。W 8 柱穴に抜き取り穴を伴っている。

S X 2 を切り、S A 7 柱列に切られている。

[出土遺物] W 5 柱穴掘り方埋め土よりフイゴ羽口P-1(図版13-11)が出土した他、各柱穴掘り方埋め土より土師器坏片、丸瓦片、平瓦片が少量出土した。

S A 7 柱列 東西方向に延びる柱列である。総長23.6m以上、柱間寸法は311~389cm、方向はE-3'-Nである。柱穴は、掘り方が一辺55~87cm×66~98cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径16~41cmの円形である。柱穴の深さは遺構検出面より60cmほどである。掘り方の埋め土は、褐色粘土質シルト及び粘土、暗褐色シルト質粘土である。W 6 柱穴に抜き取り穴を伴っている。

S A 6、S A 8 柱列、S X 2 を切っている。

[出土遺物] W 6 柱穴の抜き取り穴より須恵器片E-22(第13図2)が出土した他、土師器坏片、甕片、赤焼き土器坏片、須恵器坏片、丸瓦片、平瓦片、繩文土器片、鐵滓が出土した。

S A 8 柱列 東西方向に延びる柱列である。総長10.2m以上、柱間寸法は309~377cm、方向はE-1'-Sである。柱穴は、掘り方が一辺86~91cm×85~94cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径16~27cmの円形である。柱穴の深さは遺構検出面より20cmほどである。掘り方の埋め土は、暗褐色粘土質シルトである。

S X 2 を切り、S A 7 柱列に切られている。

[出土遺物] W 1 柱穴掘り方埋め土より丸瓦片、平瓦片が少量出土したのみである。

S X 2 調査区のほぼ中央から南半にかけて検出した。平面形は、遺構が調査区外へ延びるために明確ではないが、東西7.74m以上、南北5.78~6.37m、深さ11~19cmの方形プランを持つと思われる。方向は、北壁沿いでE-1'-Nである。断面形は扁平な逆台形を呈し、底面は平坦で壁は直立気味に立ち上がる。堆積土は、褐色粘土質シルト、暗褐色粘土質シルト、暗褐色粘土質シルトである。

S A 6、S A 7、S A 8 柱列、S D 32溝跡に切られている。

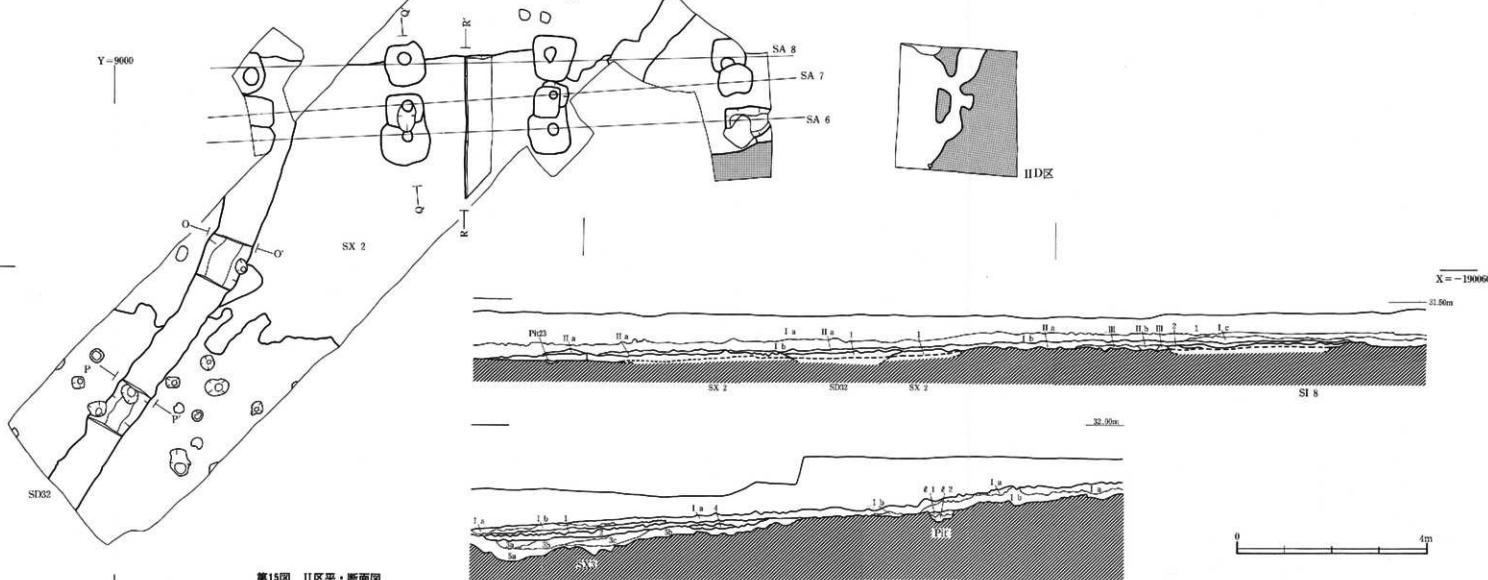
[出土遺物] 堆積土中より平瓦片が2点出土した。

部位	土色	土性	備考
SA8W2	1 16 YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	柱旗跡
SA7W6	1 16 YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	柱痕跡
	2 10 YR4/4 暗褐色	粘土質シルト	黃褐色土・小礫を含む
	3 10 YR4/4 暗褐色	粘土	丸瓦片・炭化物を含む
SA6W5	1 10 YR4/4 暗褐色	シルト質粘土	柱痕跡
	2 10 YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	柱痕跡
	3 10 YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	小礫を少含む
	4 10 YR3/3 暗褐色	粘土	

第14図 SA 6・7・8 柱断面図

層位	土色	土性	備考
基本層位			
I a	2.5 YR 6/6	黃色	砂 粘土
I b	10 YR 4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	白鈍角土・小礫を含む
I c	10 YR 4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	白鈍角土・小礫を含まない
II a	10 YR 6/6	黃色	粘土質シルト
II b	10 YR 3/4	暗褐色	シルト 小礫を含む
III	10 YR 2/3	黒褐色	シルト 沖山土の塊を多量に含む
Pn23			

SX2
1 10 YR 4/4 黄色 シルト
SX3
1 10 YR 3/4 暗褐色 粘土質シルト 小礫を含む、腐朽物を一部に多量に含む
SD2
1 10 YR 3/2 黑褐色 シルト質粘土 小礫を含む
SI8
1 5 YR 6/3 黄色 シルト 小礫を含む
2 7.5 YR 3/2 黑褐色 粘土質シルト 暗褐色を斑状に含む
基本層位
I a 10 YR 3/2 黑褐色 粘土質シルト 腐化物との隙を少量含む
I b 10 YR 3/3 黄褐色 粘土質シルト 腐化物との隙を少量含む
I c 10 YR 3/4 暗褐色 粘土質シルト 明黄色土・粒を少量含む
2 10 YR 5/6 黄褐色 シルト質粘土 小礫を少量化
SX3
1 10 YR 6/1 黑褐色 粘土質シルト 灰青褐色土・粒を少量含む
2 10 YR 2/2 黄褐色 粘土質シルト 灰青褐色土・粒を少量含む、初期地盤土・灰青褐色土・灰褐色土を含む
3 a 10 YR 3/4 暗褐色 粘土質シルト 小礫を下部に少量に含む
3 b 10 YR 3/3 黄褐色 粘土質シルト 中等量に腐朽物を一部に多量に含む
3 c 10 YR 3/4 暗褐色 粘土質シルト 中等量に腐朽物を少量含む
4 10 YR 3/3 黄褐色 粘土質シルト 中等量を少量化
5 a 10 YR 4/3 黄褐色 粘土質シルト 腐化物を全量含む
5 b 10 YR 2/3 黄褐色 シルト 明黄色土・粒を少量含む



第15図 II区平・断面図

S D32溝跡 調査区の中央北縁沿いより西半にかけて検出した。総長9.2m以上で南北方向に延びる溝跡である。上幅58~97cm、下幅29~48cm、深さ18~25cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。方向は、N-23°-Eで、堆積土は褐色粘土質シルト、暗褐色シルト質粘土、黒褐色シルト質粘土である。

S X 2 を切っている。

【出土遺物】 堆積土中より土器片、甕片、須恵器片、丸瓦片、平瓦片、鐵滓が出土した。

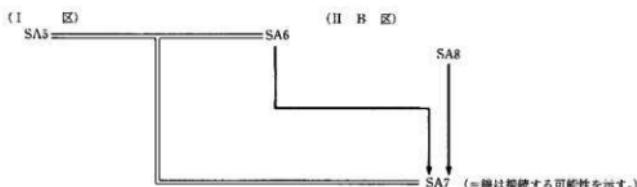
S I 8、9 穴道構は検出したにとどめている。

3.まとめ

今回の第10次調査で発見された遺構は、柱列5列、溝跡10条、窓穴遺構5基、土坑6基、性格不明遺構3基、小柱穴、ピットなどである。ここでは以下の項目について若干の考察を加え、まとめとしたい。

○ S A 5・6・7・8 柱列について

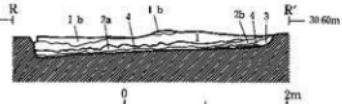
今回の第10次調査では、昨年の第9次調査で発見したS B 3掘立柱建物跡を取り囲むような形で西側に1列、南側に3列の柱列を検出した。各柱列の重複関係は以下の通りである。(並列関係は必ずしも遺構の同時性を示すものではない。)



I区ではSA 5柱列の南端と推定される柱穴のみ重複が認められる。II B区ではSA 7柱列がSA 6柱列とSA 8柱列を切っており柱列の配置からSA 5柱列南端の柱穴の重複は、SA 6・SA 7柱列の重複に対応するものと推定される。一方SA 8柱列はSA 5柱列の南端部分までは延びていないと考えられ、またSA 6・SA 7柱列に比べ東西の柱筋にばらつきがある。

次に出土した遺物については、SA 6・SA 8柱列の柱穴より凸面繩叩きで、凹面にきわめて粗い布目痕の付いた平瓦片が出土している。これは陸奥国府である多賀城跡のIV期の年代が与えられているものであり、貞觀11年(869)以降の9世紀後半代のものである。またSA 5柱列の柱穴からは赤焼き土器片が出土していることから、9世紀末以降の年代が考えられる。しかし各柱列とも残存状態が良好でなく、遺構の一部を検出したにすぎないことから、各柱列の年代は9世紀後半から10世紀代とみておきたい。

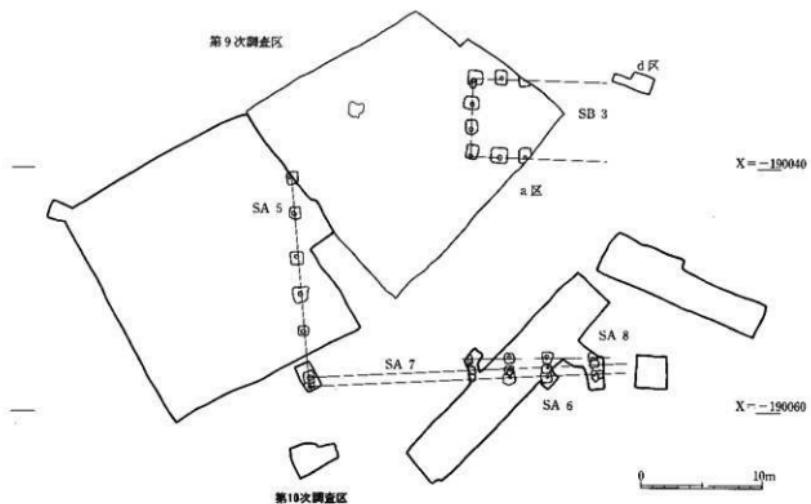
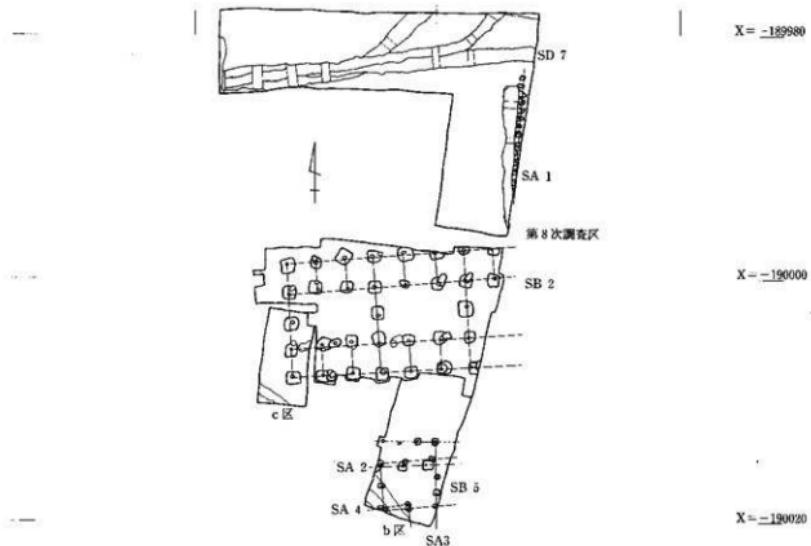
さらに、これまでの調査で検出した主要な遺構の方向は、S B 3掘立柱建物跡(N-1°-E)を中心とした真北方向基準の遺構群とS B 2掘立柱建物跡「僧房」(N-4°-W)を中心とした真北よりやや西に偏する遺構群とに大別できる。昨年度の調査では、S B 3掘立柱建物跡がS B 2掘立柱建物跡「僧房」より先行する可能性を指摘した。したがってそれらの建物と同方向である今回検出した各柱列が同じような変遷をしている可能性もある。このことについては、今後とも出土遺物の年代も踏まえてさらに検討していきたい。



SX 2 断面図

層位	土色	土 性	備考
1 b	10 YR4/3 にかい黄褐色	粘土質シルト	旧耕作土
2 a	10 YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	小礫、酸化鉄を含む
2 b	7.5 YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	中礫を多量に含む
3	10 YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	鉄滓、土石をフローティング
4	10 YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	小礫を微量に含む

第16図 SX 2 断面図



第17図 燕沢遺跡遺構配置図

写 真 図 版



図版1 I区全景（東より）



図版2 II A区全景（南より）



図版3 II B区全景（西より）



図版4 SA5柱列全景（南より）



図版5 SA6・7W1柱穴（南より）



図版6 SA5柱列N4柱穴土層断面（西より）

図版7
SA6・7・8柱列全景
(南より)



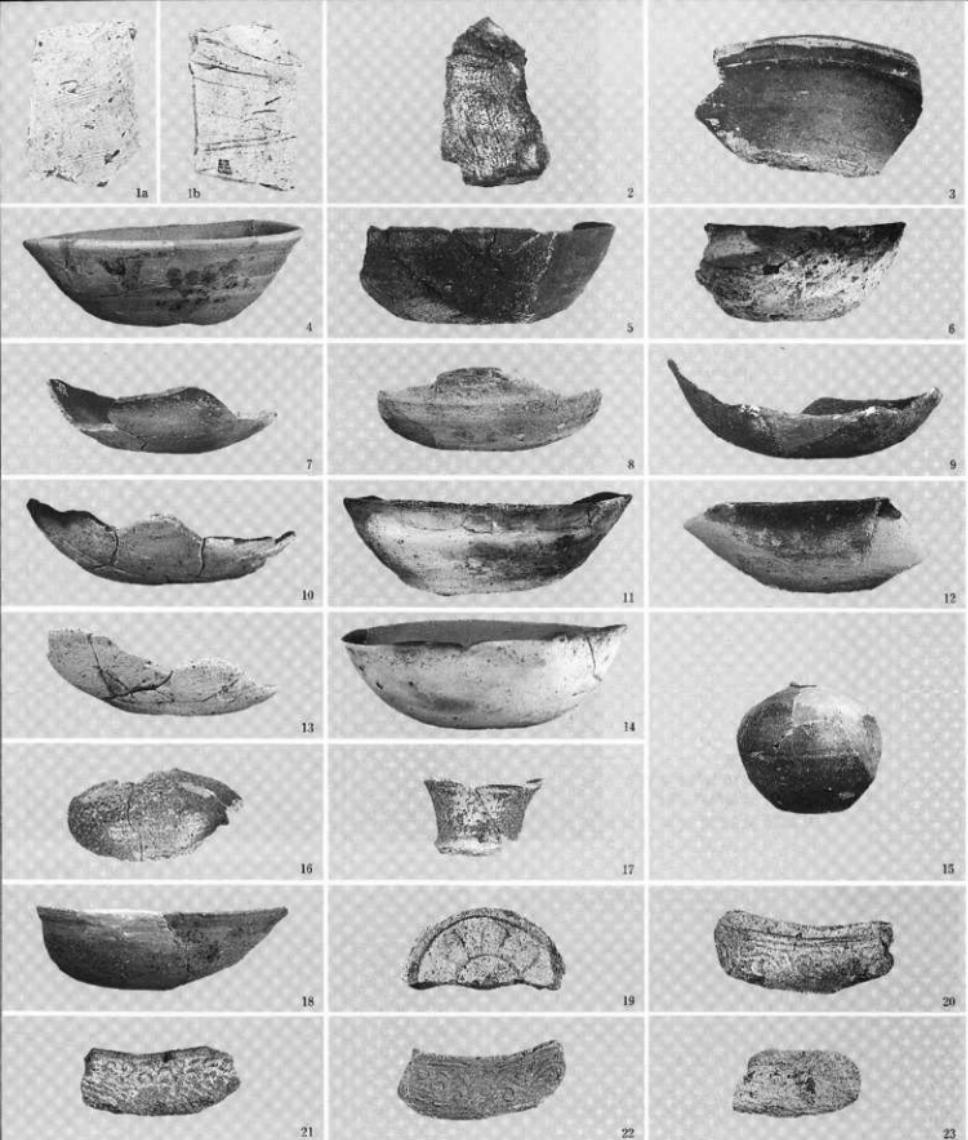
図版8
SA8柱列W2柱穴
土層断面(東より)



図版9 SAS柱列・SK17土坑・SD21溝跡全景

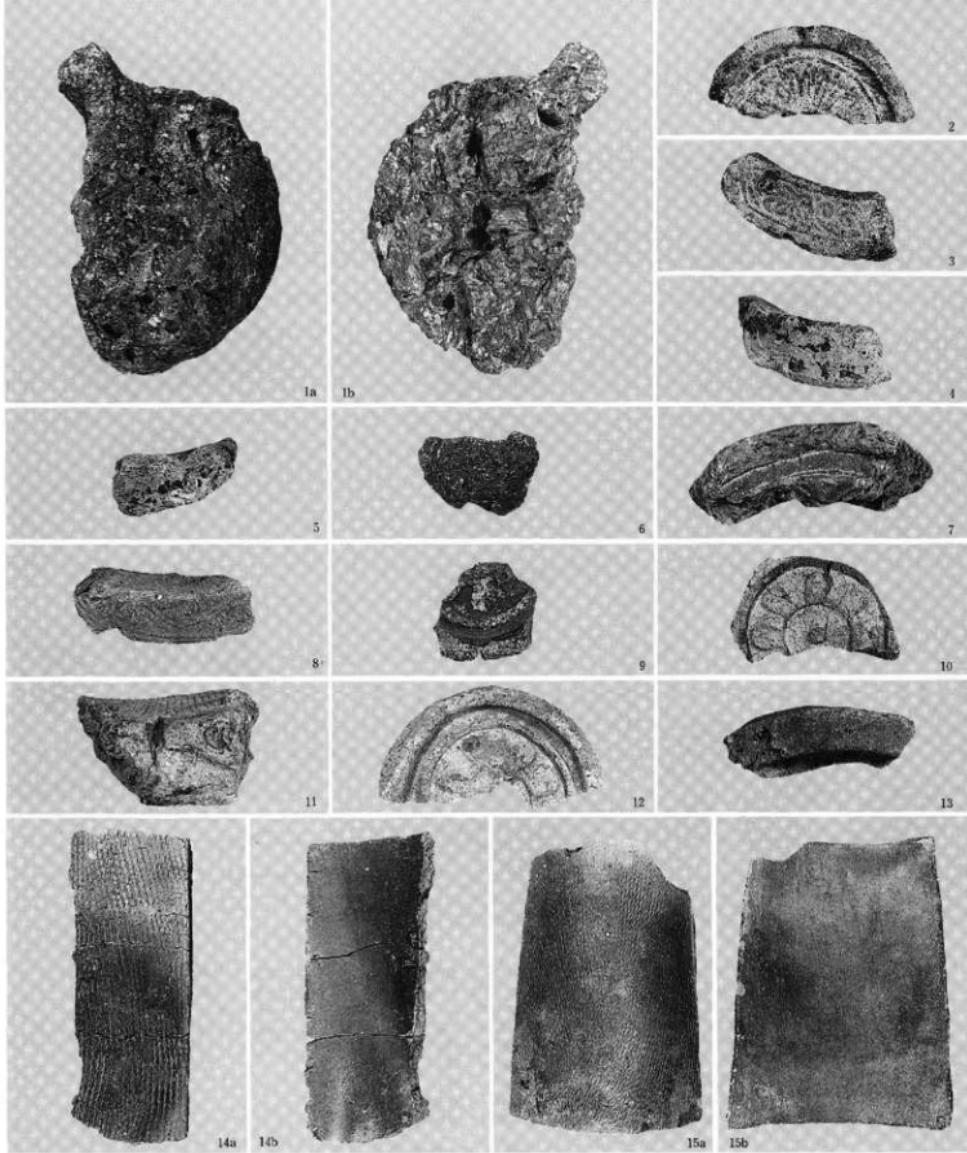


図版10 SK18土坑遺物出土状況 (G-50・62)

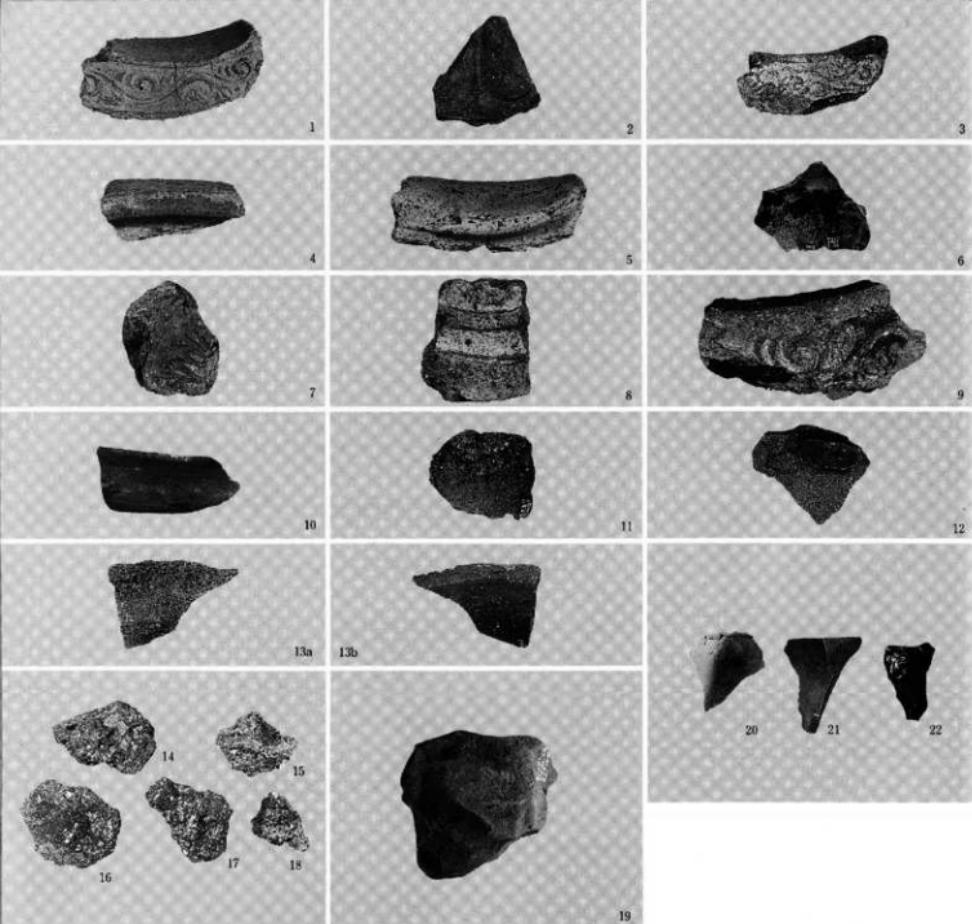


1. G-52	箕斗瓦	SA5N3 柱頭跡	9. D-72	环	SI6	17. E-17	広口壺	SI6
2. P-2	不明土製品	SASN4 掘り方	10. D-73	环	SI6	18. E-20	环	SI6
3. E-22	甕	SA7W6 抜き取り穴	11. D-74	环	SI6	19. F-24	軒丸瓦	SI6
4. D-67	环	SI6	12. D-75	环	SI6	20. G-47	軒平瓦	SI6
5. D-68	环	SI6	13. D-76	环	SI6	21. G-51	軒平瓦	SI6
6. D-69	环	SI6	14. D-77	环	SI6	22. G-61	軒平瓦	SI6
7. D-70	环	SI6	15. E-15	甕	SI6	23. G-63	軒平瓦	SI6
8. D-71	环	SI6	16. E-16	甕	SI6			

図版11 出土遺物 (1)



图版12 出土遗物(2)



1. G-50	軒平瓦	SK18	10. E-21	坏	造構検出面	19. K-23	石器	不明品	S16
2. F-27	軒丸瓦	SK19	11. P-1	フイゴ羽口	SA6W5掘り方	20. K-21	石器	剥片	SD26
3. G-59	軒平瓦	SK20	12. E-24	把手付竈	SI6	21. K-20	石器	スクレーパー	S16
4. G-57	軒平瓦	表土	13. E-18	竈	SD26	22. K-22	石器	剥片	造構検出面
5. G-58	軒平瓦	表土	14. N-4	鉄滓	SI6				
6. E-19	坏	櫻乱	15. N-5	鉄滓	SI6				
7. F-23	軒丸瓦	造構検出面	16. N-6	鉄滓	SI6				
8. F-31	軒丸瓦	SD26	17. N-8	鉄滓	造構検出面				
9. G-46	軒平瓦	造構検出面	18. N-9	鉄滓	造構検出面				

図版13 出土遺物(3)

[2] 郡山遺跡

1. 位置と環境

郡山遺跡は、仙台市太白区郡山二丁目～六丁目に位置し、東西800m、南北900mの60万m²に及ぶ遺跡である。遺跡の北から東にかけて広瀬川、南を名取川が流れ、西北は長町の市街地を介して標高100～200mの青葉山丘陵が迫り、西南は平野部が続いている。発掘調査は昭和55年から継続的に進められ、以下のことが明らかになってきている。すなわち、新しい時期（II期官衙）と古い時期（I期官衙）の2時期の官衙が同地にあったこと。I期官衙は造営基準方向が真北から30～40°ふれており、材木列や溝跡により区画され内部には官舎や倉が集中していたこと。II期官衙は造営基準方向が真北方向を取り、四町(428m)四方の範囲で外郭に材木列と大溝をめぐらしていたこと。内部中央には四面廂付建物の他に、石敷や石組池などの稀な遺構があること。II期官衙南方には同一基準方向の寺が建っていたこと。寺とII期官衙の間には、四面廂付建物をはじめ大型の掘立柱建物群が存在すること。7世紀後半代から8世紀初めまで、官衙の機能が終了することなどである。

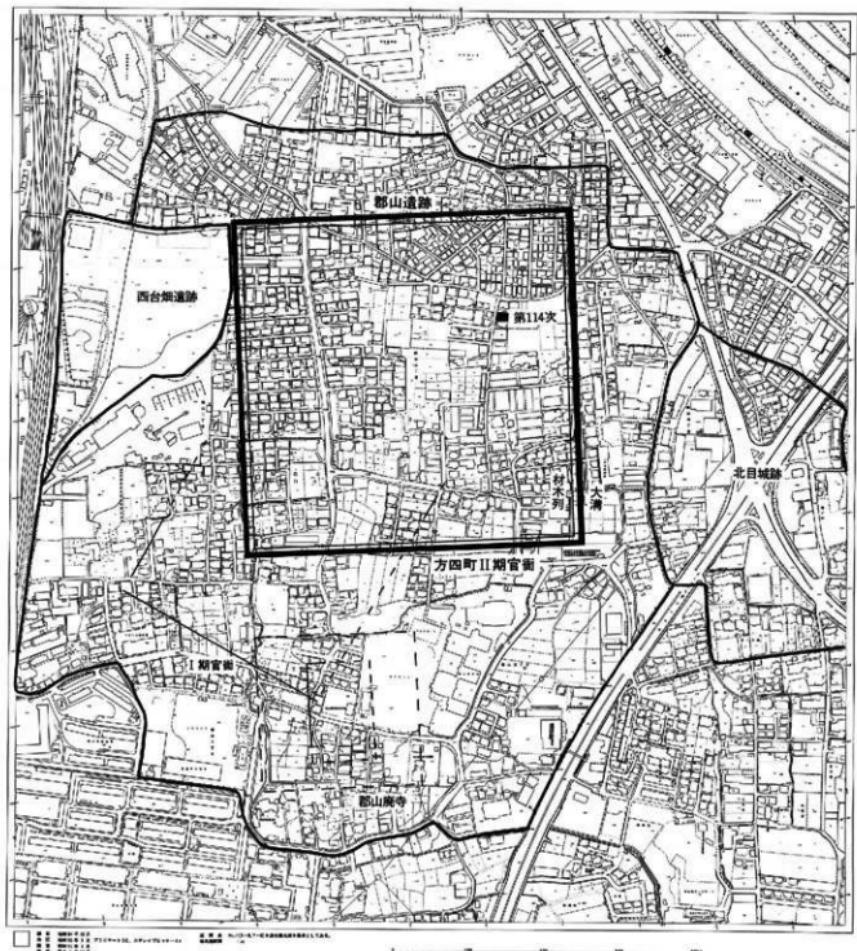
2. 調査概要

郡山遺跡の発掘調査については、仙台市文化財調査報告書第215集「郡山遺跡XVII——平成8年度発掘調査概報——」に詳細に記述し、本報告では概要を載せるにとどめる。

第114次調査

第114次調査は、仙台市太白区郡山3丁目23-8伊藤みさほ氏より、同住所に所在する住宅の解体新築に伴う発掘届が平成8年11月26日付けで提出されたのを受けて、12月9日に実施した。調査地は、方四町II期官衙内の北東部に位置している。当地は、以前に煉瓦用の粘土を採取するための掘削により、旧地形が削平されていると考えられた地点であった。しかし建築される建物の基礎工事に伴って、地表より1.5m下まで土壤改良が実施されるため、遺構の確認調査を行なった。

敷地の北側で、土壤改良の実施される部分の1.5×6mの範囲に調査区を設定した。表土排除をしたところ、地表より2m下に至っても石炭ガラが検出され、さらに下層にも続いている状況であった。よって調査区内の写真撮影と土層断面図を作成し、調査を終了した。遺構、遺物は発見されなかった。



第18図 郡山遺跡位置図

[3] 成館跡

1. 調査に至る経過

本沢上土地改良事業は平成6年度から実施された農地総合改良事業である。平成7年9月に本沢上土地改良事業共同施行委員長・奥山倉吉から埋蔵文化財の発掘届が提出され、成館跡の水濠部分を埋め、さらに一部道路・河川・水路を建設する計画であったことから、事前の発掘調査を実施することとした。平成7年度には成館跡全体の地形測量・航空写真撮影を実施し、発掘調査は平成8年11月5日から着手した。

2. 調査要項

遺跡名 成館跡（宮城県遺跡番号21106）

調査地点 仙台市青葉区芋沢字駒込（旧地名 荒屋敷西）

調査原因 本沢上土地改良事業

調査対象面積 13,000m²

調査面積 約140m²

調査期間 平成8年11月5日～11月15日

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

担当職員 篠原信彦 竹田幸司

調査参加者 奥山きみ子 川崎としこ 庄子きみよ 庄子きよ子 庄子康子 樋川けい子 梁取洋子

調査協力者 本沢上土地改良事業共同施行 庄子与治

3 遺跡の位置と環境

成館跡はJR愛子駅の北方約4kmの仙台市青葉区芋沢字駒込に所在し、奥羽山系の船形連峰から派生してくる七北田丘陵・国見丘陵の南側に当たり、広瀬川の一支流である芋沢川によって形成された標高132mの河岸段丘上に立地している。

芋沢川の下流域には中世と考えられる寺下館跡、原館跡、荒神館跡、馬場城跡、江六城跡、芋沢西館跡などの城館跡が位置しており、また南方約2kmには縄文時代早期末葉から前期初頭の竪穴住居跡13軒などが発見された蒲沢山遺跡のほか、縄文時代の高野原遺跡・赤坂遺跡などが位置している。

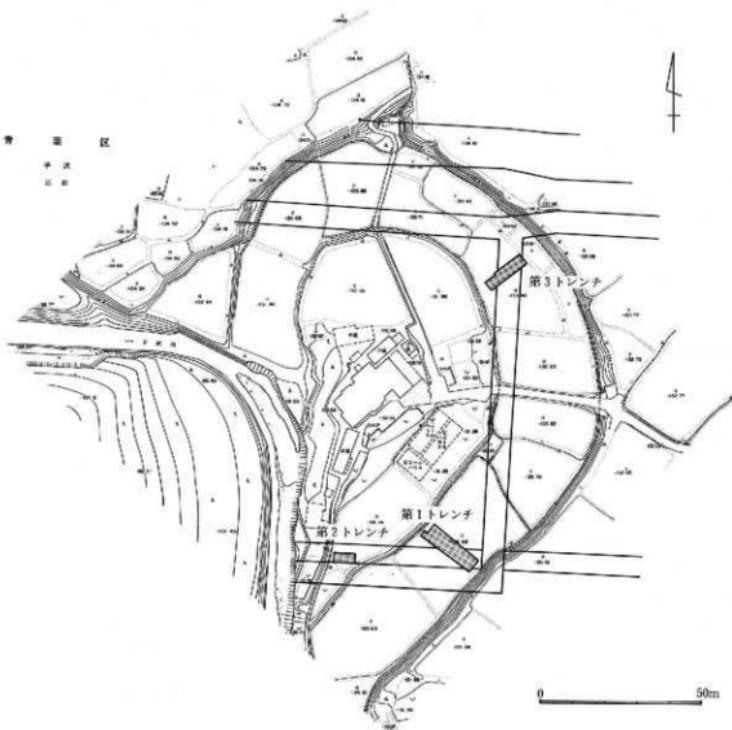
成館跡の記録については、江戸時代の「仙台領古城書上」・「安永風土記書出」には見られず、記録として初見するのは宮城郡誌が最初である。宮城郡誌には、「大沢村にある芋沢の七館址の一つ」として記載され、館主は不詳である。また「宮城町誌」「仙台領内古城・館」にも同様の記載があり、いずれも城主は不詳あるいは不明とされている。

「仙台領古城・館」によれば、「東西50m、南北100m、芋沢川方面を底辺とし、東側に頂点をおく三角形の地形が館あとである。そのまわり、北、東、南の三面が大体115mの大水濠（今は低い水田）により、くまなくとり巻かれるのが一大特徴。…西面には高い台地（土壁あと？）を置き、その背後は芋沢川の絶壁に終る。総合的に論ずれば、規模は中型であるが、その防禦陣に一大特徴が見られる要害無類の平城、と高く評価できる。」と記載されている。



No.	遺跡名	立地	時代	No.	遺跡名	立地	時代
1	城 郡	段 丘	中世	10	高野原遺跡	段 丘	調文
2	鬼 神 郡	段 丘	歴 中世	11	中原溝跡	段 丘	調文
3	寺 下 郡	段 丘	中世	12	若葉溝跡	段 丘	調文 (中)
4	原 郡	段 丘	中世	13	本 郡 城	段 丘	中世
5	馬 堀 城	段 丘	中世	14	本 郡 遺 路	段 丘	調文
6	江 六 城	段 丘	中世	15	一本杉道跡	段 丘	調文 (中・後)、平安
7	芋 沢 西 郡	段 丘	中世	16	北原街道遺跡	段 丘	調文
8	蘆 沢 山 遺 路	段 丘	調文 (早・前)	17	北原街道B遺跡	段 丘	調文 (前)
9	赤 坂 遺 路	段 丘	調文	18	下野道跡	段 丘	調文

第19図 遺跡位置図



第20図 調査区位置図

4. 調査の方法

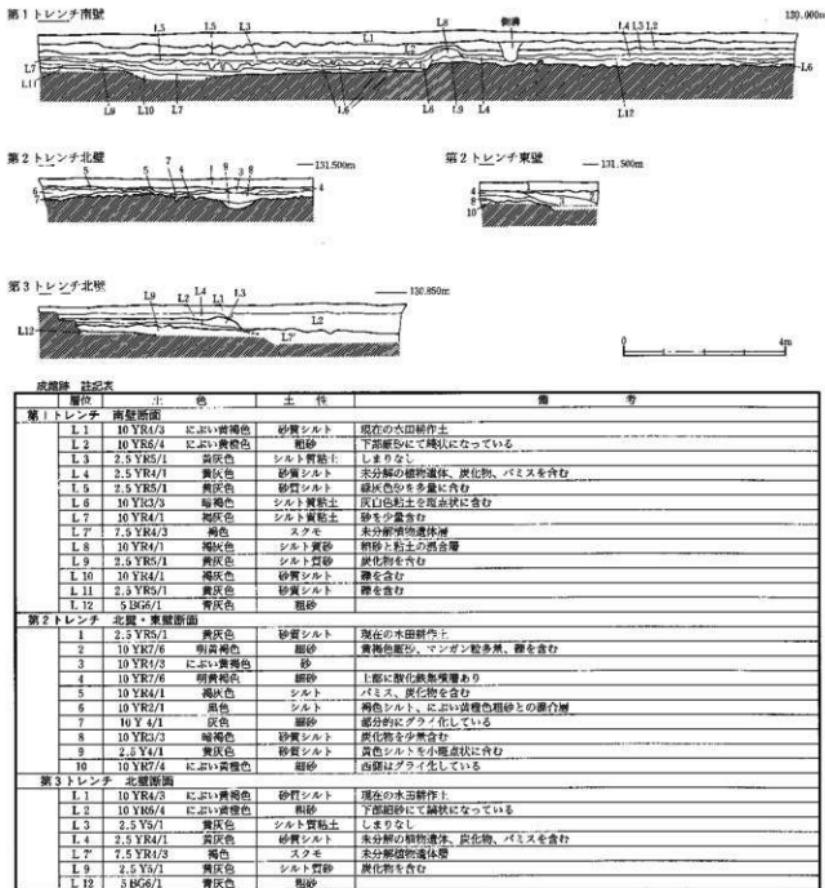
土地改良事業に伴い、埋められる「水濠」部分と河川改修や道路・水路等によって破壊される部分を対象にして調査を実施した。調査区は「水濠」部分に2ヶ所、館内部の平坦部分に1ヶ所のトレンチを設定して、主に重機により表土等を除去した。

5. 調査の概要

成館跡は東西140m、南北160mの範囲であり、南西は芋沢川で囲まれ、その背後には成館山と呼ばれる標高180mの丘陵が続いている。範囲内部は東西50m、南北約100mと南北に長い規模で、周囲は幅20~30m、深さ約1.5から3mの「水濠」が巡り、館跡の中心部には庄子与治氏宅が建っている。

第1トレンチ

水濠に直交するように5×19mのトレンチを設定して実施したが、漏水が著しく調査は難航した。基本層は13層認められた。1層は現在の水田耕作土であり、2層は粗い砂で約20cmと厚く、洪水で一気に堆積したものと考えら



第21図 調査区断面図

れる。3~5層は黄褐色シルト質粘土・砂質シルトの水田耕作土である。調査区を横断するように畦畔が認められた。7~9層は未分解の植物遺体層あるいは植物遺体を含む層である。10~12層は褐色・青灰色砂質シルト・粗砂で大きな河原石が混じる。13層は砂礫層で湧水が著しい。基本的に層の堆積は水平に堆積している。

第2 トレンチ

水路及び道路部分を対象として館跡内部平坦面に3×7 mのトレンチを設定した。基本層は10層認められた。1層は現在の水田耕作土である。6層は黒色シルトと褐色シルト等が斑点状に混じる層であり、8層は黄色シルトを小斑点状に混入する暗褐色砂質シルトである。10層はにぼい黄褐色細砂で、この上面で土坑1基、溝跡1条が検出された。SK-1土坑は直径1.8mのほぼ円形を見するもので、断面形はU字形で深さ約45cmを測る。堆積土は

3層あり、暗褐色・黄灰色・黒褐色の砂質シルトである。SD-1溝跡は調査区の西端で検出され、幅50cm、深さ5cmと浅い溝跡で南北方向に走る。土坑・溝跡から遺物が出土していないため時期は不明である。

第3トレーニング

第1トレーニング同様に水濠に直交するように3×7mのトレーニングを設定した。このトレーニングも第1トレーニングと同じ状況であり、基本層についてもほとんど変わりない。

6.まとめ

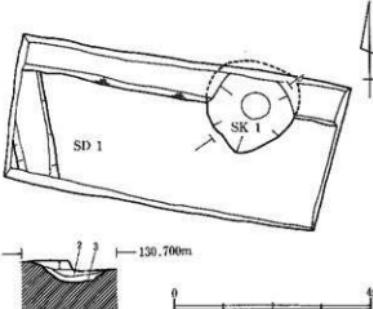
今回の調査は「水濠」部分と館内部の一部分の調査である。

調査により時期不明の土坑1基・溝跡1条、水濠内では近世から近代と考えられる水田土壤が検出された。

成館跡に伴う遺構は不明であり、「水濠」についても旧河川をそのまま利用したものと考えられるが、あるいは単なる旧河道なのか不明である。成館山にも館跡関連の遺構は見られない。

参考文献

- 宮城郡教育会編纂 1929：「宮城郡誌」
宮城町誌編纂委員会1969：「宮城町誌 本編」宮城町
紫桃正隆 1973：「史料 仙台領古城・館 第3巻」宝文堂



第22図 第2トレーニング平面図・SK1断面図

層位	土色	土性	備考
SK1	1 10 YR2/3	暗褐色 砂質シルト	炭化物を少量含む
	2 2.5 Y4/1	黄灰色 砂質シルト	黄色シルトを小窓点状に含む
	3 2.5 Y3/1	黒褐色 砂質シルト	しまりなし



図版14 成館跡航空写真

図版15 第1トレンチ全景



図版16 第1トレンチ断面



図版17 第2トレンチ全景



図版18 第2トレンチ断面



図版19 第3トレンチ



図版20 第3トレンチ断面



報告書抄録

ふりがな	せんだいへいや いせきぐん							
書名	仙台平野の遺跡群							
調書名	平成8年度発掘調査報告書 燕沢遺跡第10次調査など							
卷次	XVI							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第216集							
編著者名	猪原信彦、長島榮一、竹田幸司、農村栄宏、森剛男							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-71 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL022-214-8893~8894							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード						
所取遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
燕沢遺跡	宮城県仙台市宮城野区 燕沢東三丁目他	04100	01001	38° 17' 10"	141° 12' 00"	19960422 ~19960624	400m ²	重要遺跡 の範囲確 認
郡山遺跡	宮城県仙台市 太白区郡山三丁目他	04100	01003	38° 13' 13"	141° 18' 30"	19961209	10m ²	個人住宅 建築工事
成館跡	宮城県仙台市青葉区 宇沢字駒込	04100	21106	38° 18' 20"	141° 45' 44"	19961105 ~19961115	140m ²	土地改良 工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
燕沢遺跡	寺院跡	平安	柱列・溝跡 竪穴遺構・土坑	土師器・須恵器 赤焼き土器・繩文土器 瓦・石器・鉄滓				
郡山遺跡	官衙跡	古墳 奈良	なし	なし				
成館跡	城館跡	中世	土坑・溝跡	なし				

仙台市文化財調査報告書第216集

仙台平野の遺跡群 XVI

—平成8年度発掘調査報告書—

燕沢遺跡第10次調査など

1997年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1

文化財課 022(214)8893

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24-24

TEL 263-1166

